

Ⅲ 調査結果

～ヒアリング調査～

Ⅲ. 調査結果 ～ヒアリング調査～

1. ソーシャルスキルについて

① ソーシャルスキルの考え方

ソーシャルスキルの捉え方は多様であり、広義には「社会適用のために必要なスキル全般」を指し、身辺自立や衣食住にともなうリビングスキルを含む多様な捉え方があった。

一方で、狭義の意味では対人関係に代表される「社会的なコミュニケーション」に焦点化して捉えている場合もあった。

また、障害種や年齢、社会環境（都市/地方など）といった要因によっても、トレーニングの対象となるソーシャルスキルは異なるといった意見もあった。

② ソーシャルスキルを育む目的

ソーシャルスキルの定義が曖昧である一方で、ソーシャルスキルを育むことで目標とする子どもの将来の姿については一定の共通認識があった。

ソーシャルスキルの取得による目的は、対人関係の上手な進め方などの「形」を習得することではなく、身につけたスキルを実際の社会生活の中で活用できるようになることで、社会の中でより良く、楽しく生きることとしている意見が多かった。

特に、SSTを実施している事業所では、行動の習得のみを目的としているところではなく、事業所外でのスキルの発揮や、スキルを身につけることでの自己肯定感や対人関係への積極性の高まりを重視している。

「具体的な意見の抜粋」

- ・ 小手先のものを習得するみたいなの、そういうような印象を受けるかと思うが、もう少し広く社会性の育ちと捉えている。
- ・ 施設内だけでなく、施設の外でも発揮できる形まで持っていく。
- ・ 日常生活の中で色んな困難を抱えてらっしゃる子どもが、いかに生きやすさに繋がっていくかが大事。
- ・ やり取りの型を覚えてもらうより、自尊心をどう高めていくかということに重点を置いている。

③ 家庭・地域でソーシャルスキルを育む上での課題

ソーシャルスキルの育みに影響している課題として、発達障害等の子ども増加・発見と、子どもを取り巻く社会環境の変化に関する意見があった。

子どもの変化については、発達障害等のグレーゾーンの子どもの増加していることにより、必要な支援や経験を子どもの時期に積み重ねることができないまま、社会に出ていくケースが増えているといった意見があった。

社会環境の変化については、保護者と子どもの関係に対する課題が増加していることや、少子化によって兄弟のいない子どもも増えていることにより、家庭内でのコミュニケーション機会の減少が課題となっているという意見があった。

また、地域においても、既存のコミュニティが衰退していることや、近年のICT機器の発達による影響や、新型コロナウイルス感染症の影響により、他人とのコミュニケーション機会が減少していることを課題視している意見があった。

「具体的な意見の抜粋」

- ・発達障害系の子どもが増えてきていると思っていて、通常学級で勉強して、社会に出る時も一般の大学を経て社会に出てくんだらうな、という子どもたちが増えてきているっていう実感はある。
- ・近年は、新たに障害者認定をされる方が増えてきているっていうと思う。今までも、認定されてないけど、生きにくさを抱えてる方たちがいたと思う。
- ・女性の社会進出などで、働き方として本当に長時間で遅くまで仕事をしている保護者も増えているから、子育てで追い込まれることが増えてるのかもしれない。
- ・保護者会とか保護者のイベントをやっても、年々参加する保護者が、特に学童期の新しく入ってきた保護者はつながりを持ちたがらないというか、横のつながりをわずらわしがるというか、少し避けるような傾向が増えてきた。
- ・子どもというか大人たちの環境が変わってます。時間のゆとりとか、場所のゆとりみたいな、包容力というか、子どもが遊べるような、あるいは少々声を出してもそれが受け止められるような環境がなくなっている。
- ・昔は商店街でソーシャルスキルが苦手なお子さんも近所の人に声をかけられたり、お使いに行ったりしていたが、今はそういうのが為されていない状況で、兄弟も少なくなって、喧嘩も少なくなって、どうしても我慢するということが少なくなっている。
- ・ゲームだったりとか、YouTube だったりとかが普及し、いい面からすると子どもがひとりでそれを見て過ごせる時間が持てる、好きなことをひとりでやれることで、保護者も助かり、ひとりで過ごせる時間があるのは良いことだと思う反面、社会の広がりとか人間の豊かさっていうようなものは減少されてしまうと思う。

2. ソーシャルスキルトレーニングについて

① 実践しているトレーニングの内容

実施内容は場面を切り分けて行うセッション型と、施設生活の全般で行う生活支援型に分かれた。セッション型では、場面を想定したロールプレイなどが行われている。

生活支援型では、生活の場面場面での躰きや課題に合わせて、モデリングや絵カードを活用したトレーニングが行われている。

② トレーニングの実施において重視すること

SST を実施する上で重視することとして、有識者や実施事業所の意見から次の4つの視点が得られた。

- (1) 当事者である子どもや保護者のニーズ（意思・意欲）の把握
- (2) 本人たちの自己肯定感を高めるプログラムの提供
- (3) 実施内容や結果のフィードバック
- (4) 施設全体での規範統合

«当事者である子どもや保護者のニーズ（意思・意欲）の把握»

- ・子どもに社会適応を図るには、子ども自身が「社会に出ていきたい」「人と関わりたい」と思うようになる、「何ができるかチャレンジしたい」とって気持ちがどれだけ充実してくるか、そのサポートが大切。
- ・必要最低限の事を教えて、それが段々できるようになると、コミュニケーションの空気を感じられるようになり、人の気持ちが少しわかるようになる。子ども自身が「人の気持ちを理解しよう」という気になることがソーシャルスキルの中で本質的に大事。
- ・保護者からの聞き取りや、保護者を通じて学校の教員の意見を聴取し、発達検査の数値等を踏まえた上で、施設によるアセスメントが必要。

«本人たちの自己肯定感を高めるプログラムの提供»

- ・アセスメントして、そこにニーズがあるからやりますって話でないと、もともと提供するものが決まっていて、アセスメントしてもやるのが一緒ってところは無しだと思う。
- ・SSTの目指してる所は狭い意味での生活技術ではなく、色々な場面を想定して、その時にどうするという予行演習的な準備状態を作ることにある。スキル上げることが目的化されるよりも、その子どもの人への好奇心、関わりたい気持ちが上がるってというのが大きい。
- ・「伝えられたら嬉しい」とか「伝わるとこんなにいいんだ」という経験を重ねることで、人に伝えることの意味とか必要性とかを少しずつ染み込ませていくことが必要。
- ・全く同じものをずっと永遠にするのではなくて、いかにお子さんたちが楽しめるかを大事にしている。

《実施内容や結果のフィードバック》

- ・事前事後評価がはっきりしていて、達成度が見える化されて保護者にフィードバックすることが必要。
- ・やりっ放しが多い感じがするので、子どもがどうやってスキルを使えているかっていうことのモニタリングなどを丁寧にやってくることが必要。
- ・保護者が納得して一緒にちょっとしたことができれば、なお子どもたちの力が上がっていくのも早いので、保護者にも協力していただいている。
- ・保護者に対して、トレーニングの内容を丁寧に説明し、モデルやロールプレイの意図、子どもがうまくできたのかどうか、できた場合やできなかった場合の声掛けの仕方など、細かい点まで説明している。そのうえで、家庭や日常生活の中で、トレーニングと同じような環境を設定できないか、家庭で実践するための助言を行っている。
- ・施設から技術を教えるだけで終了ではなく、社会の中で子どもがスキルを使いこなせるようになることが目標で、そのためには、保護者や学校との連携は不可欠になるため、保護者と密に連携を取ることが重要。
- ・3カ月に1回は施設での子どもの状況を評価し、保護者にフィードバックしている。
- ・半年後の目標をどう上手に立てていくのか、その目標が本人の意思に合っているのかどうかをチェックし、最終的に可能なのかどうか、施設でそれを目標にするのが適切なのかというのを考えた上で目標設定がちゃんとできているかをケース会議とかで検討している。
- ・職員や保護者にフィードバックすることで、特に保護者にSSTの視点がかかなり根ざしてきてると思う。何かあった時にそこに目を向けられる視点が育つので、子ども自体の成長っていうのもそうだが、理解者や協力者が増えるっていうところも大きい収穫と感じている。
- ・保護者だけでなく、子どもに目標を共有することを大事にしており、本人に伝わる目標をかけることも重視している。

《施設全体での規範統合》

- ・SSTのプログラムをやっていないところでも、職員は普段からSSTの理念を認識したうえで子どもに接している。
- ・支援介護の基本ブックという行動批判、行動規範とかの方針をまとめているので。その基本ブックにのっとなって支援員は支援をしている。入ったばかりの新しい職員は、どういう関わりをしたらいいかって全く分からない。こういう関わりはよくないっていうのを知識として知るためには、規範を示すのはすごく大事。
- ・いろいろある教材で、どのタイミングで何を進めようかっていうのが、職人技でしかありませんだと、やっぱり発展はないと思う。その人に何が必要かというアセスメントから、プログラムの実施、それを継続してどうしていくのかっていうところが、職員個人の能力に頼らないで管理できるのは必要。

③ 専門性の担保について

SSTを行う上での専門性の担保については、SSTに関連する研修への参加や、職員の資格やスキルを重視した採用、施設外の専門家・研究者と協働したツールやプログラム作成を行うことで、プログラム全体の専門性を高めているという意見があった。

《具体的な意見の抜粋》

- ・ 毎年 SST の外部研修に参加している。
- ・ 併設している児童発達支援事業所の ST に相談している。
- ・ 専門家の講習に参加したり、事業所間で連携して合同研修を開催している。
- ・ 職員の 4 割ぐらいが臨床心理士や公認心理士を取得している。
- ・ 指導員の採用にあたっては選考のハードルを高めに設定している。
- ・ 顧問に応用行動分析学を専門としている研究者がいる。
- ・ 大学の先生と一緒にアセスメントシートを独自に作って、自立とか、読み書きとかも含めて、言語とかも含めて、どのように今の状態なのか、それが半年 1 年後どう変わっていったのかというのを検証している。

④ 保護者への支援について

SSTを実施している施設では、保護者への支援を重視しているとの意見があった。

目的として、保護者の視点を通した子どもに関する情報の交換に加えて、SSTの実施内容や子どもの変化を保護者にインプットすることで、家庭や日常生活の中でも、施設での関りと同様の環境に近づけるようにすることで、普段の生活の中でもスキルを発揮できるようなサポートのために保護者との関わりを重視している意見があった。

《具体的な意見の抜粋》

- ・ 本的には子どもと一緒に参加する形で実施してもらい、観察してもらって様子や感想を書いてもらって、それを保護者にフィードバックしていたり、保護者同士で話し合ったり、実際に SST をやってもらうというか、家の中でこういう状況になった時に使えそうだねといった感触を持って帰ってもらうことを目標にしている。
- ・ 帰りはお迎えに来ていただくことで、保護者の対話や、その日にあったことを口頭でお伝えしたり、実際に保護者にちょっとした時間でも、こんなふうに過ごしてるんだ、というのを見ていただいている。
- ・ 家庭でも SST を実践するための助言や、施設での取組を見てもらえるようにしている。そのため、基本的に施設でのトレーニングは保護者も同伴で行い、保護者に対して説明を行う時間を設けている。

3. 障害児福祉施設でのソーシャルスキルトレーニングについて

① 期待していること

障害児福祉施設で SST を行うことへの期待については、子どもの成長や興味・関心にあった支援を行うことで、単純なスキルの習得だけではない面で良い効果をもたらすことができるとの意見があった。

また、年齢の異なる利用者同士の関係や、地域との近さといった点でも、学校や家庭とは異なる環境の中で経験・体験を増やせるといった意見もあった。

《将来を見据えた取り組み》

- ・ SST は使える方法の中の一つに過ぎないので、子どもの福祉を第一にして、どんな方法でも使って、子どもが成長して、生活が安定して、「ああよかった、こういう場所があって」みたいな場所として機能することが必要。
- ・ 障害を持つ人が将来的に働くようになり、何か問題が起こったときに SST をやりましょう、ではなく、長期的に子たちも働く人になることを見据えて、その年齢、段階にあった SST をつなげていくような形ができてればと思う。
- ・ 障害児福祉施設から次の成人の障害福祉サービスに「どうやってつなげていくか」という視点で考えると、障害児施設で SST を行うのは重要。
- ・ 自分自身が、何が楽しいっていうのに気付いたり、経験してく中で、それを楽しめるようになる。それがないと、会社に行って家に帰ってくるだけの生活になってしまって、なかなかストレス発散の場がない。自分の好きなことを、施設の中で見つけてくれると、今度は保護者と一緒にとか、自分でとか、ヘルパーさん使いながら、趣味を楽しめたりする所に繋がってくることはある。
- ・ SST を行ってると言うより、あそこに行ったら自分が興味のあるサッカーができるとか、あとプラモデル作るでもいいし、電車好きだったら、あそこの施設は遊びに行ったら電車で遊んでるだけだけど、その中にプロの視線が入って、うまくやり取りできるようにみたいな感じでやってくれると、子どもの負担が少なく楽しく行ってくれるから親もハッピーで、スキルも楽しいから余計身につくみたいなほうに持って行っていただけるとありがたい。

《学校や家庭ではない環境で得られる経験・体験》

- ・ 人と人との関わりで、嫌な気持ちだったり、いい気持ちだったり、複雑な気持ちだったり、様々な体験ができるっていうのが本当にいいところ。
- ・ 地域に資源があるので、地域の人たちの例えば商店街の人と連携をして、商店街と提携して、商店街の人たちが結構協力してくれるみたいな、そういったコミュニティを作って、実際に彼らも安全にトレーニングができて、そして、地域の人たちとも交流できるみたいなことができるよ。
- ・ 10代、中高生ぐらいの子どもだと家庭で言われても多分厳しいと思う。親に言われて素直に聞く子はあんまりいないと思うので、それぐらいの年代の子は家庭以外の方がいいかなと思う。

② 課題を感じていること

障害児福祉施設で SST を実施する上での課題について、次の3つの視点が得られた。

- (1) 子どもが安全に過ごせる場所としての優先度
- (2) 取組内容の質の担保
- (3) 関係機関との連携

「子どもが安全に過ごせる場所としての優先度」

- ・子どもにとって学校じゃない第2の居場所、第3の居場所というか、何かちょっとほっとできる場所であればいいなというくらいなので、多くは期待していない。
- ・子どもたちも余暇として行ってる部分もあり、人数も違って、あとは、構成メンバーも色々ある所では、生かしてほしいなと思うが、難しいだろうなと思う。
- ・今できてることを、できるだけその場でも発揮できるような環境とかを作ってもらいたいな、くらいで十分だと思う。
- ・放課後等デイサービスの役割は、就労している保護者が帰ってくるまでの間、安全にお預かりをするっていう所に主眼があるので、あえて冒険をして、何かトレーニングをするというのはしないと思う。

「取組内容の質の担保」

- ・単純にこの教材をやればいっていうふうに単純に思ってしまう事業所も多いのが課題。本当の実践ってところが広がるかが大事。
- ・事業所の持ち味や、通ってる子どもたちのタイプなどに関係なく、プログラムっていうのが先行しがちなのが課題だと思う。
- ・SST を行っている人がきちんと訓練を受けた人なのか非常に疑問。その場で何かやっただけ、場合によっては悪影響があるかもしれないので、訓練を積んだ方に実施して欲しい。
- ・施設が増えたことで、困っている人に居場所ができたのは良いこと。ただし、質の良い療育ができるようになることが必要。
- ・全ての施設で SST を正しく実践するのは難しいと思う。それを目指せる施設が多ければいいとは思いますが、そこまで力を入れるのかなっていったら、多分難しいと思う。
- ・SST のノウハウを他のスタッフに伝えていける様な人材がいなければ、SST をやっていこうと思っても難しい。

「関係機関との連携」

- ・研修っていう知識のインプットも必要だとは思いますが、連絡会の中に入るとか、学校や保護者と情報共有して見直しをするような、事業所の取組を振り返られる機会を作るのも必要。
- ・昔からある事業所は、研修の案内や、色々なつながりがあって、療育方法を学ぶ機会があるが、学ぶ術を知らない事業所もあると思う。

③ 障害児福祉施設で SST を普及させるために必要なこと

障害児福祉施設で SST を普及させるために必要なこととして、SST の定義を明確にすることや研修の充実が必要といった意見があった。

具体的な方向性に資する意見として、定義の明確化については、療育方針に基づくライセンス制や、体験型施設とトレーニング型施設での区分といった意見もあった。

また、研修については既存の専門資格に拘りすぎず、子どもの発達に関する関心や知見のある人材に対して、アセスメントやトレーニングでの関わり方に関する研修を重視する意見があった。

《定義の明確化》

- ・ ソーシャルスキルトレーニングというからには、少し具体的なもので取り上げないと、いくらルールだっていっても、大人の側がどうするっていうのが、漠然としたものだとは具体性に欠けると思う。
- ・ 施設のレベルが多様であるという前提に立って、目標の設定の仕方を工夫する必要がある。例えば、ライセンスみたいなのを取得して、定型的な、標準化した SST プログラムができます、みたいな所に置くのではなくて、逆にその目的の部分、子どもにどうなってほしいか、みたいな所で設定する。やり方は色々あっていいかもしれない、色んな施設があっても、自分たちこのやり方が得意、というのでやっていけばいいと思う。
- ・ 体験とソーシャルスキルトレーニングは区別しないといけないと思う。体験は安全に利用できるっていうことと、地域との理解が促進されるっていうことなので、ソーシャルスキルトレーニングには入れてはいけないと思う。ただし、体験とソーシャルスキルトレーニングのそれぞれの事業所が連携して、例えば月に 2 回ぐらいソーシャルスキルトレーニングを学び、その他を体験型の施設を利用しますっていうところで連携すると、それはそれでうまくいくと思う。

《研修の充実》

- ・ OT、PT、ST を入れれば、専門的な SST ができるとは限らないので、発達障害に向けての専門家として全て認定するわけにはいかないの、アセスメントを使えるようにする研修とか、ソーシャルスキルトレーニングを実施する上での専門職の研修っていうのが重要。
- ・ 専門性をいくつか分けて、見える化して保護者が選べるようになるとうい。例えばソーシャルスキルトレーニングステッカーが貼ってあって、何をしてくれるのかなっていうと、うちは身辺自立関係とかコミュニティ関係のスキルを一生懸命やっていますとか、うちはメンタル結構力入れていますとか、そういうような分かりやすいものがあるといいんだろうなと思う。
- ・ SST の専門職は様々です。医者もいれば、ソーシャルワーカーもいれば、心理、作業療法士。どの専門職のバックグラウンドを持っていても、対人的な行動の取り方に関心があって、子どもに関心を持って、子どもの支援・成長を助けるってことに関心があるような人を、現場の人と一緒にやっていけるようなようことで育てることが重要。

4. 学校などの関係機関との連携について

① 学校との連携

子どものソーシャルスキルの習得状況や生活状況を把握する上で、学校との連携は重要となるが、施設・学校ともに、直接的な情報交換については消極的な意見が多かった。

連携を推進する方向性として、保護者の協力や療育への理解促進による情報の橋渡しや、連携による成功事例によって連携が促進されることや、教育と福祉をつなぐ新たな情報プラットフォームの構築といった意見があった。

《連携の必要性に関する意見》

- ・学校で有してるプログラムはこうなんだけど、これとこれについて特に重点に今やってるといふ日々の引き継ぎとか、そういったものはあってもいいと思う。
- ・学校のプログラムとか指導計画とか評価は貴重な情報だと思う。心理士に見てもらったものがあって、人的とか環境的にも厳しい所があるが、それをどう施設に引き継ぐかで、施設に何できるのか、あるいは施設としてどうしていきたいかっていうコンセプトとのすり合わせが上手いけばいいと思う。
- ・学校と施設のそれぞれが別々のことをしていると、やっぱりお子さんも混乱する。ある程度統一した支援とか指導とかっていうのは必要。
- ・時間をかけて先生とコミュニケーションをはかるってことも大事。

《連携に消極的な意見》

- ・連絡会っていうのもあるが、感染症対策への中院喚起や下校のお迎えのときの車のルール、欠席のときの連絡方法といった事務的なことになるで、子ども一人一人のコミュニケーションとかアセスメントといった、そこまでの話はきちんとしたものはない。
- ・学校としてはアセスメントを福祉施設に共有することはしていない。
- ・学校はとても難しい。関係性をまず築くのに時間かかりますし、時間かかったなと思うと先生いなくなる。
- ・施設で培ったスキルが活かしているか確認することもあるが、なかなか頻繁に機会を設けられない。

《連携推進に向けた意見》

- ・きつとしっかりした保護者だったら、学校生活支援シートはあるので、それを活用して学校やると思う。
- ・保護者に関心を持ってもらうことで、学校との橋渡しができるようになる。
- ・保護者によっては学校のアセスメントのコピーを共有してくれる場合がある。
- ・困難事例に関する支援会議に学校から要望が出てくるようになった。成功事例があると、教員も安心して校外を頼れるようになる。
- ・個別の支援計画が、福祉で作ってるものと、教育で作ってるものを、保護者を媒介にしないと連携できないっていうことになってるので、そこにアプリでも作ってもらうってことが重要だと思う。

② その他の関係機関との連携

学校以外の関係機関との連携では、医療機関と施設の連携は双方ともに消極的な意見が見られた。他の事業所や、様々な関係機関との連携においては、必要性の高さに関する意見があった。

地域との連携では、地域ボランティアの活用や、地域の人との交流による地域理解の促進に向けた活動に関する意見があった。

《医療機関との連携》

- ・病院と学校の連携は行いやすいが、障害児福祉施設の場合、病院からアプローチするのは難しい。
- ・病院との連携については施設側の方の遠慮があると思う。

《多様な関係機関での連携》

- ・放課後等デイサービスを利用してる子どもは、複数の事業所を掛け持ちして色々なところに行っている。事業所ごとの過ごし方も支援計画も違い、子どもたちって求められることが毎日違うって大変だろうなって思う。子どもの見立て方とか、今何が必要かっていうあたりは、関わっている機関ですり合わせて共有化していけるといいなと思っている。
- ・困難家庭への対応は施設だけでは難しいところが多く、相談支援事業所や子ども家庭支援センターなどとの連携の重要性を感じている。
- ・自立支援協議会の下部組織として放課後等デイサービス事業者間の連携を行うワーキングチームがあり、事業所スキルの底上げや勉強会や研修会の必要性についての検討ができている。

《地域との連携》

- ・長い間子どもが成長していく過程で、絵が得意だとか、ピアノが得意な人とか、運動が得意な人を、ボランティア活動で受け入れたら、子どもの生活も豊かになっていくと思う。
- ・限られた職員がぎりぎりしてんじゃなくて、若い人のやりがいのあるボランティア活動で、あなたの特技を生かしてくださいみたいな、そういう呼びかけがあってもいいよなとか思う。
- ・定期的にバザーのようなものを作って地域の人達をたくさんあけぼの学園の中に引き入れたりだとか、ボランティアを通して地域の人とか、学生さん、支援者の卵の方達にたくさん来てもらって子どもたちと接してもらったりっていうふうな形で、それも地域支援のひとつとしてやっている。
- ・地域の中でゴミ拾いをすることで、子どもたちがゴミ拾いちよこちよこやってる姿を近所の方に見ていただき、地域の人たちに子どもたちの存在を理解してもらえるようにしている。

IV 資料編

1. 障害児福祉施設調査票

障害児施設における
ソーシャルスキルトレーニング実態調査

記入にあたってのお願い

- 封筒宛名の事業所の管理者の方によるご記入をお願いします。なお、管理者の方による回答が難しい場合は、代理の方がご記入ください。
- 令和3年9月1日現在でお答えください。
- 回答は、あてはまる項目を選んで、その番号を○印で囲んでください。
また、設問によっては、回答していただく方が限られる場合がありますので、**網掛け**の指示にしたがってお答えください。
- 記入された調査票は、令和3年**10月24日(日)**までに同封の返信用封筒に入れ、ポストに投函してください(切手は不要です)。

【このアンケート調査についての問い合わせ先】

障害児施設におけるソーシャルスキルトレーニング実態調査 事務局

〒105-0011 東京都港区芝公園 3-1-22 5F

(株式会社日本能率協会総合研究所内に設置) 担当者：富本、遠藤

受付時間：祝日を除く月曜日から金曜日までの午前10時から午後5時まで

電話番号：03-6435-7201 もしくは 03-6435-7767

FAX番号：03-3432-1837

メール：hisanori_tomimoto@jmar.co.jp

※メールでのお問合せは件名に「東京都 SST」と記載してください

<調査委託機関について>

- ・この調査は、東京都福祉保健局が「株式会社日本能率協会総合研究所」に委託して実施しています。

はじめに、本調査に回答していただく方のお名前などを記入してください。

1. 貴事業所名	
2. ご記入いただく方について	役職： 氏名：
3. 連絡先	電話 () メール @

事業所の概要

問1 貴事業所で提供している障害児福祉サービスをお答えください。

【○は1つだけ】

1. 児童発達支援	4. 福祉型障害児入所施設
2. 医療型児童発達支援	5. 医療型障害児入所施設
3. 放課後等デイサービス	6. 閉所した/障害児福祉サービスを提供していない

問2 貴事業所の対象者をお答えください。

【主な対象に◎、その他は○】

1. 身体障害児（肢体不自由）	6. 精神障害児（発達障害）
2. 身体障害児（視覚）	7. 精神障害児（高次脳機能障害）
3. 身体障害児（聴覚）	8. 重症心身障害児
4. 知的障害児	9. 医療的ケア児
5. 精神障害児（精神障害）	10. その他（ ）

問3 貴事業所の事業開始年度を和暦でお答えください。

【○は1つだけ、数字を記入】

1. 昭和	_____ 年度から事業開始
2. 平成	
3. 令和	

問4 貴事業所の経営主体をお答えください。

【○は1つだけ】

1. 地方公共団体	5. 公益法人
2. 社会福祉協議会	6. 営利法人（会社）
3. 社会福祉法人（社会福祉協議会を除く）	7. 特定非営利活動法人
4. 医療法人	8. その他

問5 貴事業所の利用定員をお答えください。

【〇は1つだけ】

1. 1～4人	4. 20～29人
2. 5～9人	5. 30～39人
3. 10～19人	6. 40～49人
	7. 50人以上

問6 令和3年9月1日時点で、貴事業所を利用している18歳未満の年齢別の人数をお答えください。

【それぞれに数字を記入】

1. 0歳児	人
2. 1～2歳児	人
3. 3～5歳児（未就学の6歳児含む）	人
4. 小学校低学年（1～3年生）	人
5. 小学校高学年（4～6年生）	人
6. 中学生	人
7. 高校生以上	人

障害児支援の内容

問7 貴事業所が18歳未満の障害児等に提供している療育プログラムについて、下記の領域にあてはまるプログラムはありますか。あてはまるものについてお答えください。

【〇はいくつでも】

1. 心身の健康や生活に関する支援	4. 言語・コミュニケーションの獲得に関する支援
2. 運動や感覚に関する支援	5. 人とのかかわりに関する支援
3. 認知と行動に関する支援	6. その他
	7. あてはまるものはない

【改めて全ての方にお聞きします。】

問13 貴事業所では、利用者の不適応行動への職員の対応方法に関する明文化された方針や指針がありますか。

【〇は1つだけ】

1. ある

2. ない ⇒ [次のページへ](#)

【問14～15は問13で「1. ある」と回答した方にお聞きします。】

問14 貴事業所の方針・指針の内容について、あてはまるものとその具体例をお答えください。

【〇はいくつでも】

1. 指導が必要な不適応行動についての事例を示している

[]

2. 利用者への職員の働きかけ方を示している

[]

3. 利用者の保護者等への報告フローを示している

4. その他

[]

問15 貴事業所の方針・指針は、どなたに周知していますか。事業所から積極的に周知している対象をお答えください。

【〇はいくつでも】

1. 事業所の正規職員

5. 教育・保育施設

2. 事業所の臨時職員

6. 利用者を担当している相談支援員

3. 利用者

7. 利用者が利用している他の福祉施設

4. 利用者の保護者

8. その他 ()

9. 特に周知していない

ソーシャルスキルトレーニングとは？

ソーシャルスキル「トレーニング」とは・・・

認知行動療法等を活用した支援方法の1つです。

SST（エス・エス・ティー）や社会生活技能訓練とも呼ばれています。

背景として、社会の中で、他人と心地よい適切な人間関係を築くためには、一定の認知や行動のスキルが必要です。

例えば、クラスメイトと親しくなりたい時には、相手からも同じように親しくなりたいと思ってもらうための行動や表現が大切になります。人によっては普段の生活の中で、こうした行動や表現を習得していきませんが、特に障害のある子どもは、自分のおかれた状況を把握することや、望ましい行動や表現を普段の生活の中での経験を踏まえながら習得していくことが、難しい場合があります。

こうした対人的な問題行動や心理的・社会的問題を抱えている人に対して、必要なソーシャルスキルを習得するために、知識の提供や練習の支援、取り組むためのコツをまとめた体系的な支援が、ソーシャルスキルトレーニングです。

ソーシャルスキルトレーニングの実施例・・・

ソーシャルスキルトレーニングは、次の手法で行われることが多いです。

ワークシート 絵カード ソーシャルストーリー	必要とされているスキルの内容について、スキルを習得することで得られるメリットや望ましい姿について、ワークシートや絵カード、ソーシャルストーリーといった言葉やイラストなどを用いたわかりやすいツールを活用します。
モデリング	必要とされているスキルをよりイメージできるように、モデルとなる行動の動画や実際のふるまいを見せます。スキルを実行することで得られる良い結果も含めて見せると効果的です。
ロールプレイ	指導員や子どもが役を演じながら適切なふるまいを習得する練習を行います。子どもが当事者の役を演じるだけでなく、第三者の立場から俯瞰して観察をする機会を提供する場合があります。
ディスカッション ディベート グループワーク	特定のテーマについて、複数名で意見交換を行う場をつくることで、人の意見を聞いた上で自分の発言を行う練習を行います。子どもが興味を示すテーマを設定したり、参加人数や時間を調整する場合があります。
ゲーム	ゲームでは、「ルールを守る」「結果を受け入れる」「仲間と協力する」などのスキルを、楽しみながら練習することができます。子どもの課題や目標に合わせてながら、ゲームへの取り組み方を意識させることが大切です。
振り返り	様々な練習で習得したスキルについて、適切なフィードバックを行うことや、日常生活の中でもスキルを発揮できているか観察を行い、習得したスキルを発揮しやすい支援を継続して行います。

ソーシャルスキルトレーニングに大切な視点・・・

ソーシャルスキルトレーニングを実施するにあたって、対象となる子どもが前向きにトレーニングに参加したくなるようなプログラムやきっかけを作ることが重要です。

ソーシャルスキルトレーニングを必要としている子どもは、それまでの“注意される・怒られる”経験から、「上手くできない」ことをネガティブに捉えやすく、自己肯定感が低くなってしまっていることも少なくありません。

スキルを習得することで、友だちと楽しく過ごせた、自分の将来に目標ができた、など、子ども自身がメリットや成長を感じられるよう肯定的な支援を継続して、自尊感情を高められるようにすることが大切です。

ソーシャルスキルトレーニングの参考例



対人関係のトラブルや
不適切な社会的行動



問題行動をしかる
望ましい行動を強要する



障害のある子どもでもわかりやすい「絵カード」や「ロールプレイ」を通じて、自分の行動がどのような結果につながるか、イメージしやすい環境をつくる。



望ましい行動をとれるように働きかける。

<留意点>

- ・すぐに望ましい行動を獲得できるわけではない
- ・望ましい行動に向けた、段階的な目標設定が必要
- ・本人のモチベーションを維持するために、「ほめる」「みとめる」ことが必要

【問 20～25 は問 19 で「1.実施している」と回答した方にお聞きします。】

問 20 貴事業所で実践している「ソーシャルスキルトレーニング」のテーマをお答えください。

【〇はいくつでも】

1. 対人関係	3. その他
2. 金銭管理・買い物	()

問 21 貴事業所で実践している「ソーシャルスキルトレーニング」の内容を簡単にご記入ください。

【自由記述】

①対象の年齢は？	
②どれくらいの頻度で？	
③どのような内容・手法で	

問 22 貴事業所では、「ソーシャルスキルトレーニング」をどのように実施していますか。

【〇はいくつでも】

1. 自事業所の職員が実施している	2. 事業所外から講師を呼んでいる
-------------------	-------------------

問 23 貴事業所で「ソーシャルスキルトレーニング」を実施している職員の職種・資格についてお答えください。

【〇はいくつでも】

1. 施設管理者	7. 作業療法士
2. 児童発達支援管理責任者	8. 言語聴覚士
3. 児童指導員	9. 理学療法士
4. 保育士	10. 心理士
5. 医師	11. 相談員
6. 看護師	12. その他 ()

問27 貴事業所では、今後、「ソーシャルスキルトレーニング」を活用していきたいと思
いますか。 【○は1つだけ】

活用したい	どちらかといえば 活用したい	どちらかといえば 活用したくない	活用したくない
1	2	3	4

【問28～29は問27で『ソーシャルスキルトレーニング』を「活用したい」もしくは「ど
ちらかといえば活用したい」と回答した方にお聞きします。】

問28 貴事業所で活用したい「ソーシャルスキルトレーニング」のテーマをお答えくださ
い。 【○はいくつでも】

1. 対人関係	3. その他 ()
2. 金銭管理・買い物	4. テーマは特に決められない

問29 活用したい理由を教えてください。 【○はいくつでも】

1. 既にソーシャルスキルトレーニングが事業所のプログラムとして確立している
2. 障害児の自立・成長に向けて必要な取組だと思う
3. 事業所の職員が普段の指導やケアを振り返るきっかけになる
4. 利用者が通学している学校等の関係機関から要望がある
5. 利用者の保護者等の当事者側から要望がある
6. その他 ()
7. 特に理由はない

【問30は問27で『ソーシャルスキルトレーニング』を「活用したくない」もしくは「ど
ちらかといえば活用したくない」と回答した方にお聞きします。】

問30 活用したくない理由を教えてください。 【○はいくつでも】

1. 既存のプログラム（ソーシャルスキルトレーニング以外）の内容が充実している
2. 自事業所の利用者への支援としては、対象の状態像が異なる
3. 実施内容や効果の有無に疑問がある
4. 新たな取組を検討する時間や経済的な余裕がない
5. 取組を実践するための人材が不足している
6. その他 ()
7. 特に理由はない

【改めて全ての方にお聞きします。】

問31 ソーシャルスキルトレーニングを導入する上で、必要なサポートや施策についてお答えください。

【〇はいくつでも】

1. 取組内容に関する事業者へのわかりやすい情報提供
2. 事業所職員を対象にした研修会などによる技術指導
3. 大学や病院などの専門家に相談できる体制
4. 新たな取組に関する利用者や保護者の理解促進
5. 教育・保育等の関係機関との利用者の療育方針の共有
6. その他 ()
7. 特にない

問32 東京都の障害児福祉施策に対してご意見がありましたらご自由に記入ください。

【自由記述】

～ 質問は以上です。ご協力ありがとうございました。～